

質料と作品の関係

—インガルデン的存在論からの貢献

岩切啓人（東京大学）

芸術作品をその質料と同定する考えは根強い。そのような素朴な見解のもとでは、絵画作品はキャンバスと、音楽作品は音の並びと同定される。しかし、ロマン・インガルデンは、緻密な存在論的依存の分析に基づく形で、そのような素朴な考えを否定している。本発表では、素朴な見解との対照のなかで、インガルデンの芸術的存在論が持つ意義を明らかにする。

まず、インガルデンの存在論の枠組みを構成する存在契機と存在様態の理論を確認する。存在契機とは多様な存在論的依存の基準であり、存在契機の組み合わせが存在様態を構成する。芸術作品が持つ存在様態とは純粹志向的な存在様態であり、本発表はこれを主に取り上げる。純粹志向的な存在様態の存在者が持つ最も顕著な特徴は、自らの存在基盤を他者のうちに持ち、何かによって創造されるという点である。インガルデンの考えによると、芸術作品はその質料であるところの物理的対象や抽象的対象を存在基盤として持つが、その質料と同定されるわけではない。というのも、質料と芸術作品が持つ性質の多くは互いに異なるからである。たとえば、芸術作品は表象的性質を持つが、質料はそれを持たない。そして、このような違いの一部に貢献するのが、芸術作品が作者の志向作用によって創造される存在者であるという点である。加えて、たとえ質料と同定され得ないとしても、芸術作品の存続にはその質料の事例の一つ、そしてそれを芸術作品として鑑賞する受容者の志向作用が少なくとも必要であるとインガルデンは考える。このように、インガルデンの考える芸術作品は、その創造と受容という二つの点で存在論的依存を果たす、存在論的に複雑な対象である。

このようなインガルデンの芸術作品の存在論は現代の存在論に対してある程度の意義を持つ。第一に、芸術作品の存続に質料と受容者の両者が必要であるという主張は芸術作品が文化的であり制度に依存する対象であることを明示する。素朴な見解によれば、人間の文化がまったく関与せずとも存在できる質料と芸術作品とが同定されるため、芸術作品も非文化的であることが帰結してしまう。これは直観的にもっともらしくない。第二に、芸術作品の発生を作者の創造作用に認めるという直観的な見解を堅固に擁護している。素朴な見解によれば、創造行為は何か既存の対象を発見することでしかなく、新しい存在者を世界へ追加することではない。しかし、このような考えは直観的にもっともらしくないだけでなく、歴史的性質が作品の性質として本質的に含まれることを見逃している。結論として、インガルデンの芸術的存在論は、依存という観点からいち早く素朴な見解の問題点を指摘しているという点で歴史的に有意義であり、直観に即した存在論を創造・受容という二つの側面から構築することを目指しているという点で理論としても有意義である。